慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	行動の基礎過程としての随伴性：若手研究者からの数量的・発達的見解（6月5日 三田キャンパス東館4階セミナー室）
Sub Title	Contingency as a fundamental determinant for human behavior: quantitative and developmental views from young behavior analysts
Author	丹野, 貴行(Tanno, Takayuki)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	Newsletter Vol.13, (2010. 9) ,p.5- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000013-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム
行動の基礎過程としての随伴性：若手研究者からの数量的・発達的見解

Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior: Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts

（6月5日　三田キャンパス東館４階セミナー室）

2010年6月5日の午後から、遺伝と発達班の主催で、California State University の Paul Romanowich 博士をお迎えしてのシンポジウムが開かれました。Romanowich 博士は行動分析学の観点から、ハトを対象としたマッチング法則や条件性強化の定量分析を進められてきました。同時に、NBA におけるシュート傾向のマッチング法則を用いての分析、喫煙と禁煙行動の行動分析といった日常社会での行動の数量的研究などの、基礎と応用の双方にわたる多彩なご研究を推進されています。今回の来日にあわせ、日本における若手研究者との間での、行動随伴性めぐる共同シンポジウムという形式で行われました。外部の方々の多数のご参加を得られ、約50人収容の会場がいっぱいになるほどの盛況となりました。

シンポジウムの中心は Romanowich 博士の発表であり、彼が近年取り組んでいる喫煙行動の改善プログラムが紹介されました。行動分析学の基礎的な知見を活かし、適切な行動随伴性を設定することで禁煙を促すことができることが示されました。その後日本の若手研究者３名からの発表が続きました。慶應義塾大学社会学研究科の熊仁美研究員からは、自閉症児を対象とした、共同注視を利用した介入プログラムが紹介されました。本グローバル COE の丹野貴行研究員からは、行動随伴性の概念の重要さと、それを数理モデルの域にまで精緻化することを目指した研究が紹介されました。最後に東京女学館大学准教授の井垣竹晴博士から、随伴性が変化した際にいったい何が起こっているのかを調べる変化抵抗研究が紹介され、その制御変数は何なのか、また動物で得られた基礎的な知見がどのような応用研究へとつながるのかが論じられました。いずれの発表も、国際誌や国際学会で発表されてきた内容を含むレベルの高いものであり、若手研究者がお互いの知識を交換する有意義なシンポジウムとなりました。またシンポジウムの進行が英語で行われ、参加した大学院生にとっては英語でのコミュニケーションを取る絶好の機会ともなりました。

（丹野貴行）

Symposium entitled “Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior: Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts” was held on June 5th at Keio University. Each speaker introduced their studies concerning contingency in experimental and applied settings.

講演会　Dr. Warren H. Meck 講演会

Lecture by Dr. Warren H. Meck: Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing

（5月26日　三田キャンパス東館4階セミナー室）

2010年5月26日、Duke 大学教授の Warren H. Meck 博士をお迎えし、“Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing” のタイトルで、講演が行われた。講演では、Meck 博士の長年の研究テーマである、「時間知覚のメカニズム」について、電気生理学、臨床研究、行動実験、脳機能イメージングなど、多岐にわたるアプローチと、そこから得られた知見が発表された。さらに、それらの知見に基づいて構築された、時間知覚の神経機構のモデルや、そのモデルで重要な役割を果たすと示唆される大脳基底核の有棘ニューロンの働きが紹介された。講演の後半には、有棘ニューロンの解剖的特性と機能的特性の関係や、関係する神経伝達物質の働きなど、参加者を交えて、活発なディスカッションが行われた。

（四本裕子）

A special lecture was delivered by Dr. Warren H. Meck, Professor of Duke University. Dr. Meck presented electrophysiological, clinical, behavioral, and imaging studies, and introduced a model for the interval timing.

１ページ目の英訳　**On Culture and Keio**

If we suppose that cultures evolve in time, it comes at no surprise that there are declining as well as rising phases in their histories. As the Muromachi culture and Hellenism clearly illustrate, declining periods are also times of mass culture. We can say that contemporary Japan is in such a state of cultural diffusion. If so, it is all the more important for the University to well protect the core elements and values of our society – academic and other. I believe that Keio University has a unique role in this regard as an institution with a history independent from and longer than the modern state in Japan. I profoundly hope that it can live up to such a great responsibility!